

支援対象者の基本情報

- 年齢・性別：60代・男性（以下E氏）
- 障害種別：身体障害
- 障害者手帳の有無：身体障害者手帳4級
- 既往歴：大腸がん
- 家族構成：きょうだいが健在だが絶縁状態にあり、実質的な身寄りのない状態。
- 支援前の状況：共同生活援助を利用していたが、他の利用者や支援者との関係をうまく築くことができず、複数の施設で入退所を重ねていた。また、自治体の窓口ではクレーマーと認識されていた。過去にセンターの支援歴あり。1回目は更生保護施設につないだものの、E氏のルール違反により退所となり、その後連絡が取れなくなった。E氏はホームレス状態で生活しており、移動手段を確保できなかったことから自転車の窃盗に至り、2回目の支援につながった。
- 支援前の生活課題：金銭管理、住居、仕事、相談先が希薄（困りごとの発散先がSNSのみ）

支援内容

■E氏が抱える生きづらさ（アセスメント・見立て）

E氏は、「自分だけ厳しくされている」「不公平だと感じやすく、**不平不満が高まるとSNSで実名を挙げて批判する行動が身についていた**」。こうした行動が支援者に敬遠される要因となり、さらに支援から遠ざかる悪循環が生じ、「**相談できる場所がない**」状態が続いている。

■生きづらさを解消するための支援

2回目となる今回の支援では、**同じ事態を繰り返さないために、支援に向けた準備を念入りに行なった**。（下図を参照）。

■今後の支援の方向性

今後の課題は、休日の過ごし方である。E氏の興味を一緒に広げながら、**SNS以外に気持ちを切り替えられる時間をつくることを目指している**。

■2回目の支援で特に重視したこと

早期連携

不動産会社や就労継続支援B型事業所の担当者が勾留中のE氏と面会し、住まいと日中活動の見通しを立てたうえで受け入れ調整を行なった。

役割分担

E氏が相談先に迷わないよう事前に役割分担を明確化した。E氏同席のケース会議にあたっては、事前に支援者同士でE氏への伝え方を打合せた。

透明性

「本人の知らないところで支援が勝手に進む」状況を避けるために、E氏にもケース会議への同席を依頼した。

日常生活場面での関係性

センター職員は、買い物や外食の同行など、E氏の生活上の細かい相談にも対応。E氏が困り事をため込みます、つながり続けられる関係づくりを意識した。



関係機関（括弧内は分担した役割）

保護観察所

福祉事務所

不動産事業者
(住まい・金銭管理)

相談支援事業所

就労継続支援B型事業所
(日中活動)大分県地域生活定着支援センター
(生活全般の相談・調整)

センターの基本情報

- 職員数：常勤8名（うち、事務員1名）
- 有資格者：7名（うち、社会福祉士6名、精神保健福祉士1名）
- 職員の主な保有資格：社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員
- 運営主体：社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部 大分県済生会（2010年受託）
- 受託法人の強み：日本最大の社会福祉法人であり、センター運営において手厚い支援がある。特に職員配置が充実しており、相談員7名全員が国家資格を有する。
- 地域の特徴：センターは小規模な地方都市にあり、県主管課を含む様々な支援機関と顔の見える関係を築きやすい。

連携にあたって苦労したことは？

- 行政機関との調整が最も難航しました。なぜなら、E氏は過去に役所窓口でトラブルを起こしており、その影響もあって今回の生活保護申請などの支援介入について、行政機関の判断に時間を要したためです。最終的には、行政機関の管理職も参加する会議が設けられ、**釈放後の生活の見通し（住まい・日中活動・相談先など）を明確に提示**したこと、ようやく支援介入の許可が得られました。
- E氏は、これまで複数の機関でトラブルが生じた経緯があったため、リスクを考慮して、受け入れに慎重に対応する事業所もありました。そのためセンターでは、E氏の特性を事業所が事前に把握できるよう、**「不安を抱えた際のサイン」「イライラが高まった際の兆候」「望ましい対応方法」などを詳細に説明しました**。また、受け入れ後に課題が生じた場合には「すぐセンターに連絡してほしい」と伝え、事業所が対応に迷った際の後方支援体制を明確にしました。このような事前共有やセンターの支援姿勢が、関係機関の受け入れの判断を後押しし、結果として多機関が役割を分担してE氏を支える体制づくりにつながったと感じています。

連携して支援を行うメリットは？

- 生活・仕事・金銭管理などを複数の機関が担うことにより、**1つの機関に負担が集中せず、生活全体を通して適切な助言や調整ができる体制になりました**。
- 支援者間で役割を分担しつつも、本人も含めた月1回の担当者会議で情報共有することで、**「E氏にとって相談先が偏らない」「支援者同士の支援方針が統一される」**という効果が生まれました。
- E氏が支援者を信頼し、日々の生活の変化について支援者に伝え、必要に応じて相談ができる関係が築けていると思います。